

『源氏物語』「にほひやか」考

松井 佳子・吉海 直人

〔要旨〕『源氏物語』の「にほひやか」について、嗅覚的な美的

形容なのか興味を抱き考察した。その結果、嗅覚に関しては消失していた。そのかわり用例を男女に分類すると、男性は光源氏系、女性は頭中将系、さらに否定形は朱雀院系の人々が主に用いられていることが明らかになった。また他の形容詞・形容動詞との関係について、「あて」「なまめく」とは相容れないものであり、だからこそ否定形と併用されている。さらに「ほほ笑み」「笑ひ」の併用については、笑顔が本心を隠す仮面の役割を担っていることがわかった。「にほひやか」は美的表現でありながら、「ほほ笑み」「笑ひ」と併用されることで、それが美的な仮面として機能するのみならず、その裏に動作主の本心が隠されていることを結論としたい。

〔キーワード〕匂ひやか・笑顔・仮面・源氏物語

はじめに

『源氏物語』桐壺巻に、

いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、
いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえ
やらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、

(桐壺巻22頁)

という一文がある^①これは桐壺帝が里下がりする桐壺更衣の顔をご覧になっている場面である。ここに「にほひやか」とある点に注目したい。これが『源氏物語』における「にほひやか」の最初の例である。

ここで「にほひやか」の意味を『源氏物語大辞典』（角川学芸出版）で調べてみたところ、

① 赤く色鮮やかなさま。(末摘花卷)

② はなやかなさま。(橋姫卷・玉鬘卷)

と出ていた。語源としては、動詞の「にほふ」から形容詞の「にほはし」や形容動詞の「にほひやか」が派生したのである(類似した「にほやか」もある)。

辞書によると「にほひやか」はほほ顔に限定された美的形容の一つということになる。藤田加代氏などは「にほふ」と「にほひやか」をほとんど区別せずに論じておられる⁽²⁾。それもあって、これまで「にほひやか」単独での研究は見当たらない⁽³⁾。

ここで問題にしたいのは、第一に「にほふ」には嗅覚的要素が存するが、「にほひやか」については嗅覚に言及されていないことである。果たして「にほひやか」に嗅覚美は存しないのであろうか。

第二の疑問として、桐壺更衣の例を見ると、表面的には「にほひやかにうつくしげ」に見えている。しかしその内面には「いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらず」とあるように、口に出したいことが心に秘められていることがわかる。そうすると『源氏物語』における美的な「にほ

ひやか」は、逆に心情を隠す仮面ということにならないだろうか。

そこで本論では、『源氏物語』の「にほひやか」を徹底的に分析し、その特徴を考察してみたい。

一、『源氏物語』の「にほひやか」

最初に『源氏物語』における「にほひやか」の用例を調べたところ、全部で十七例見つかった。その内訳は、

桐壺一例、若紫一例、末摘花一例、薄雲二例、玉鬘一例、胡蝶一例、行幸一例、藤裏葉一例、若菜上一例、若菜下二例、夕霧二例、竹河一例、橋姫一例、椎本一例、東屋一例である。用例数がやや少ないこともあって、用例の偏りなどは認められない。

試みにこの十七例を人物別に分類してみたところ、男性の例が六例・女性の例が十一例であった。当然のことながら女性、もっといえば比較的若い女性のイメージが強い言葉と言えそう。そのうちの、

・浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれどにほひやかな

らぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、
〔玉鬘卷135頁〕

は正月の衣配りにおいて、夏の御方（花散里）用に誂えられた
衣装の描写なので、例外とすべきかもしれない。ただし衣装自
体にそれを着用する女性の美質や性格が象徴・反映されている
とすれば、女性の用例として活用可能であろう。

もう一例、

・口おほひの側目より、なほかの末摘花、いとほひやかに
さし出でたり。見苦しのわざやと思さる。〔末摘花卷304頁〕

は、末摘花の赤い鼻を揶揄しているものである。この場合は美
的形容どころか「見苦しのわざ」とあるように、欠点を示す例
となつている。視覚的に照り輝くような艶のある美しさとされ
る「にほひやか」であつても、使いようによつては例外的にマ
イナスの意味で用いることができるようだ。

ここであらためて男性の用例を見ると、使用されているの
は、

兵部卿宮一例・光源氏二例・夕霧一例・春宮一例・匂宮一
例

の五人であつた。興味深いことに、このうちの光源氏・夕霧・
匂宮は源氏の一族（血縁者）で占められていた。しかもそれ以

外の兵部卿宮と春宮の例は否定的な用法になつているので、明
確に使い分けられていると見ることもできる。否定的な例を見
ると、

・いとあてになまめいたまへれど、にほひやかになどもあら
ぬを、
〔若紫卷227頁〕

・にほひやかになどはあらぬ御容貌なれど、さばかりの御あ
りさま、はた、いとことにて、あてになまめかしくおはし
ます。
〔若菜下巻156頁〕

と出ている。二人は親王・東宮という高貴な血筋であり、これ
といった欠点も認められない人物である。その二人をあえて
「にほひやか」でないとしているのはどうしてだろうか。本文
を見ると、別に「あてになまめい」・「あてになまめかしき」と
評価していることがわかる。

あるいはこれは、美の傾向が「にほひやか」と「あてになま
めかし」では異なつている（相反する）からではないだろう
か。それに関して『小学館古語大辞典コンパクト版』の「なま
めかし」の語誌に、

清新でみずみずしい美、しなやかでしつとりした美、自然
のまままで巧まない美を表し、「あて」「清ら」「奥ゆかし」

などと協和し、「うるはし」「にほひやか」「をかし」などとは相いれない。〔伊牟田経久〕

とあるのが参考になる。必ずしも「にほひやか」が主体ではないものの、ここで「なまめかし・あて・清ら・奥ゆかし」系の美と、「うるはし・にほひやか・をかし」系の美は相容れないと規定されているからである。

なるほど「あてになまめかし」と「にほひやか」の対立はここにぴったりあてはまる。先の花散里の衣装にしても、「なまめきたれどにほひやかならぬ」とあつてこれも符合している。また句宮の、

かへすがへす見るとも見るとも飽くまじくにほひやかにをかしければ、出でたまひぬるなごりさうさうしくぞながめらるる。
(東屋巻46頁)

も「にほひやかにをかし」と適合していた。

二、「にほひやか」ならぬ人

ここでもう少し否定的な「にほひやか」にこだわってみた。というのも、女性では花散里だけでなく女三の宮にして

も、

にほひやかなる方は後れて、たたいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見えたまふ。
(若菜下巻191頁)

と否定的に描かれているからである。なお、ここでは「にほひやか」と「あてやかにをかし」が対立していることになる⁽⁴⁾。

ところでここにあがっている否定形の三人は、親王・内親王以上の高貴な身分であった。特に春宮と女三の宮は朱雀院の皇子・皇女(異母兄妹)であるから、「にほひやかならぬ」家系と言えるかもしれない。もちろん否定的な「にほひやか」は、必ずしも大きなマイナス要素になっているわけではない。それに関して全集本の頭注二五には、

皇女(二品親王)という高貴な身分ゆえの美質。こうした外的な要因によってしか賛美されない点に注意。

というコメントが付けられていた。しかし「にほひやか」にしても見た目(外的要素)であるから、これは不適切ではないだろうか。

もう一度春宮の例に戻って、誰の視点から描かれているかを

調べてみると、それは柏木の視点であった。しかもこの文の少し前には、

春宮に参りたまひて、論なう通ひたまへるところあらんかしと目とどめて見たてまつるに、にほひやかになどはあらぬ御容貌なれど、
(若菜下156頁)

と出ており、柏木はせめて女三の宮の異母兄妹である春宮の顔を見ることで、そこに女三の宮の面影を見出したいと目論んでいたのである。

これを踏まえて女三の宮の容貌が描かれているとすれば、意図的に春宮と相似形に描かれているとしても不思議ではあるまい。これに関して全集本の頭注二に次のような有益なコメントがあった。

源氏の「にほひやかにきよら」(若菜上一四四頁末)と対照的。

これによれば柏木は春宮を見る前に光源氏と対面しており、そこで、

など戯れたまふ御さまの、にほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはん、
(若菜上巻144頁)

と、源氏の「にほひやか」な美が目には焼きついていた。そうすると柏木は「にほひやか」な源氏と「にほひやか」ならぬ春宮を比較していたことになる。その結果、皇族である春宮よりも、臣下の光源氏の方がはるかに優つていることが表明されていることになる。その意味では、男性に用いられている「にほひやか」は、必ずしも高貴な血筋の絶対美を表わすものではなく、物語の主人公性を表わしていると言えるかもしれない。

なお源氏に用いられている「にほひやかにきよら」だが、先の辞書の説明では「にほひやか」と「きよら」は相容れないものとされていた。しかし源氏の美は、両者を融合させた美として機能しているのではないだろうか⁽⁵⁾。それこそが光源氏の絶対的な美であろう。

三、「にほひやか」の用法

次に用例の多い女性の例について詳しく見ていきたい。前述の末摘花と否定的な花散里・女三の宮を除くと、残り八例となる。その内訳は、

桐壺更衣一例・玉鬘二例・雲居雁二例・玉鬘大君一例・宇

治中の君二例・

となつてゐる。男性の場合と同様、内親王クラスの高貴な女性には用いられていないし、藤壺や紫の上などの重要人物にも用いられていないことがわかる。桐壺更衣を含めて、やはり「にほひやか」は最高級の美ではないといえそうだ⁶。

ここで留意しておきたいのは、玉鬘・玉鬘大君・雲居雁の三名は頭中将の娘・孫ということである。その三名で八例中の五例を占めているのであるから、女性は頭中将系に偏つてゐるといえそうだ。大雑把に分類すると、「にほひやか」は光源氏系の男性と頭中将系の女性に用いられ、否定形は朱雀院系の皇族に用いられてゐることになる。

それと承譜を異にするのが、宇治中の君である。中の君の例は橋姫巻の垣間見場面に出ている。もともと視覚美であるから、垣間見場面でも用いられやすいのであるう。

さしのぞきたる顔、いみじくらうたげににほひやかなるべし。
(橋姫巻139頁)

ここは大君と中の君が対照的に描き分けられてゐるところだが、その中の君は薫の目に「いみじくらうたげににほひやかなるべし」と映つてゐる。それはまさに見た目の印象であつて、

内面とは切り離された評価である。ただし「げ」「べし」があるので、ストレートな評価とはいいいがたい。もう一例も薫の目に中の君が、

かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかにや
はらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうざまにぞお
はすべきと、
(権本巻217頁)

と映つてゐる。こちらも「あならうたげと見えて、にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ」とあつて、やはりストレートな表現ではないものの、最初の時より評価が高くなつてゐるようにも読める。中の君は薫から二度も「らうたげ」「にほひやか」と評されているわけだが、しかしそれはヒロイン性を保証する美ではなかつた。

では「にほひやか」と「らうたげ」の組合せは妥当なのであるうか。「らうたげ」な女性の代表格である女三の宮が、否定的な「にほひやか」であつたことからすると、これもやや異質な組合せと考えるべきかもしれない。ただし『栄花物語』殿上の花見巻にも、

斎院はまた、なつかしうをかしげにらうたげに匂ひやかに、撫子の花を見る心地ぞせさせたまへる。
(221頁)

と、「らうたげ」と併用されている例がある。ここに「らうたげ」に近い「うつくしげ」と併用されている桐壺更衣を加えることもできそうである(2)。そうなるとやはり女性の内面(本心)は見抜かれていないことにならないだろうか。

四、「にほひやか」と「笑ひ」

それとは別に、「にほひやか」が「笑ふ」と結びついた例が特に目に付く。これに関しては玉上琢彌『源氏物語評釈第二巻』の注二に、

「にほひ」は、今と違って、視覚に訴える美である。「にほひやか」は豊艶な感じ、色つやの良い、笑顔の美しい。

と記されていた。ただしコメントがあるのは若紫巻の兵部卿宮の否定的な例であるから、末尾の「笑顔の美しい」はその場面とは不応である。しかしながら「にほひやか」の用法全体で見ると、「笑顔」は看過できない要素であった。

「笑ふ」が併用されている「にほひやか」の用例としては、以下の四例が該当している。

1 「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口

に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。(和歌省略)
いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

(薄雲巻439頁)

2 君いとにほひやかに笑ひたまひて、「あないとほし。弄じたるやうにもはべるかな」と苦しがりたまふ。

(行幸巻315頁)

3 「からかりしをりの一言葉こそ忘れね」と、いとにほひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしういとほしきものから、うつくしう見たてまつる。

(藤裏葉巻455頁)

4 この文の気色なくをこつり取らむの心にて、あざむき申したまへば、いとにほひやかにうち笑ひて、「もののはえはえしき作り出でたまふほど、古りぬる人苦しや。」

(夕霧巻429頁)

最初の1は源氏の例である。大堰に住む明石の君を訪問しようとしたところ、紫の上から中将の君(女房)を介して皮肉を込めた歌を詠みかけられた源氏は、「にほひやかにほほ笑」んで返歌を詠む。この笑いは美的という以上に照れ笑いに近いのではないだろうか。ただしその笑いが紫の上に見えていたかどうかは不明瞭である。

2は玉鬘の例である。源氏が末摘花のことを愚弄したことに對して、玉鬘は「にほひやかに笑」っている。これも「苦しがりたまふ」とあることから、批判を込めた笑いというか、笑顔と心情がずれていることがわかる。3は夕霧が雲居雁の大輔の乳母に向けた笑いである。かつて夕霧のことを「六位宿世」と批判した大輔の乳母に對し、夕霧は嫌み交じりに言葉を掛けている。それがわかるから大輔の乳母は「恥づかしういとほしき」と感じているのである。夕霧の笑顔にはそういった思いが込められていると読める。

4は雲居雁の例である。夕霧が雲居雁に一条御息所からの手紙を奪い取られた後、それをなんとか取り戻そうとする夕霧に對して、雲居雁は「にほひやかにうち笑」っている。これに關して全集本の頭注二〇には、

夕霧の言葉は、自嘲の形をとりながら、じつは、雲居雁に對するうれしげらせの言葉である。雲居雁は、その手にのせられて、機嫌が直る。
(429頁)

とあるが、いかがであろうか。ここはその笑顔とは裏腹に、雲居雁の内面の苦惱・嫉妬をこそ読み取るべきではないのだろうか。

以上の四例は、すべて相手に對して見せた笑顔であるが、恋愛場面は皆無であった。むしろ明るい華やかな笑いとは裏腹な、動作主の内的感情を読み取ることが重要であろう。こういった「にほひやか」な笑いは、本心を出さない仮面の役割を担っていると考えられる。幸い四例とも動作主の感情表現が付されているので、読者が表面的な笑顔(仮面)に騙されることはなさそうであるが。

五、『源氏物語』以外の用例

ここで『源氏物語』以外の作品における「にほひやか」に目を向けてみたい。調べてみたところ『源氏物語』以前では、

『うつほ物語』五例・『枕草子』一例

があげられる。また『源氏物語』以後では、

『紫式部日記』一例・『浜松中納言物語』五例・『夜の寢覚』

四例・『栄花物語』五例・『堤中納言物語』二例・『とりか

へばや物語』八例

が見つかった。総計三十二例であるが、それでもさほど多い数ではあるまい。この中で「にほひやか」と「笑ひ」が併用され

ている用例に絞ると、

〔浜松中納言物語〕 329頁

『うつほ物語』一例・『浜松中納言物語』一例・『夜の寝覚』

一例・『とりかへばや物語』二例

の五例が残った⁽⁸⁾。

まず『うつほ物語』の用例であるが、

笑みたまはぬに、愛敬いと匂ひやかなり。

〔うつほ物語三 楼の上上巻428頁〕

とある⁽⁹⁾。これは右大臣兼雅が、かつての妾の一人であった

宰相の上とその子である若君を三条殿に引き取るため、二人の

元を訪れた場面である。ここで注意すべきは、「匂ひやか」と

「笑み」が併用されてはいるもの、若君は「笑みたまはぬに」

と否定形になっている点である。これなど「にほひやか」と

「笑み」が対立しているようにも取れるが、肝心なのは本来

「にほひやか」と「笑み」が併用されるものであることを匂わ

せている点である。いずれにしても『うつほ物語』の例は、

「にほひやか」と「笑み」を関連付けた最初の例ということに

なる。

次に『浜松中納言物語』の用例を見ると、

いみじうにほひやかにほほゑみ給へるはづかしきに、

は、唐后の同母妹である吉野の姫君を、吉野の山奥から京へ連

れて行こうとする中納言と姫君の語らいの場面である。「いみ

じうにほひやかにほほゑみ」んでいるのは中納言で、それを見て

いる姫君は「はづかし」がっている。ここは自信に満ちた中納

言の美しい笑顔が、姫君を圧倒していると読める。

続いて『夜の寝覚』の例は、

いとにほひやかにうち笑ひなどしたまひしこそ、世の物思

ひ忘るる心地せしか。〔夜の寝覚〕 83頁

とあり、姉の夫である中納言の子を身籠ってしまった中の君

は、姉への申し訳なさなどから苦惱し、次第に衰弱していく。

ここで注目すべきは、「にほひやかにうち笑」う姿は現在の様

子ではなく、女房が昔の中の君の姿を回想している点である。

かつてはその笑顔によって世の憂さも忘れるような気がしたと

あるので、これは癒しの笑顔だったといえる。

最後に、『とりかへばや物語』における二例を検討したい。

まず、

えも言はずにほひやかにうちほほ笑みて臥したまへるを見

るに、〔とりかへばや物語〕 222頁

は、中納言（実際には女君）の妻である右大臣の四の君の妊娠（宰相の中將の子）が発覚した後のことである。女である自分の妻になった四の君を不憫に思い、宰相の中將との密通も仕方がないことと受け止めたりもしている。ただし中納言は四の君に対して恨みも抱いている。自分の誠実な思いが四の君に分かってもらえなかったからである。そういった複雑な感情を胸の内にしまいこんで、表面上は「にほひやかにうちほほ笑」んで臥している。それを見ている四の君は「いとどしき心地は泣き沈みたまへる」と、ますます辛い気持になっている。

もう一例は、本来の女性の姿に戻って若君の出産を終えた女君が、宇治での権中納言との生活に終止符を打つ決意をした直後の場面である。

わりなくにほひやかにうちほほ笑みて、

『とりかへばや物語』 383頁

出産を間近に控える四の君の元へ通う権中納言に対して、女君は自身の決心が悟られぬよう、理解ある女を演じることに専念している。そして、「にほひやかにうちほほ笑み」ながら己の決心を隠し通している。これなど女君の巧みな演技ということもできる。

『とりかへばや物語』の用例は、間違いなく『源氏物語』の用法を継承しているが、それだけでなく同一人物でありながら、男性の姿と女性の姿で用いられているところが興味深い。

結 び

以上、『源氏物語』の「にほひやか」を中心に考察を行ってきた。最初に疑問とした嗅覚に関しては、どうやら「にほひやか」からは消失しているようである。それとは別に、用例を男女に分類すると、男性は光源氏系、女性は頭中將系、さらに否定形は朱雀院系の人々が主に用いられていることが明らかになつた。

また「にほひやか」単独ではなく、他の形容詞・形容動詞との併用を調べてみたところ、「あて」「なまめく」とは相容れない関係にありそうである。だからこそ「にほひやか」の否定形との併用が可能なのであろう。また「にほひやか」と「ほほ笑み」「笑ひ」の併用については、華やかな笑顔が本心（感情）を隠す仮面の役割を担っていることがわかった。

さらに『源氏物語』以外の用例を検討したところ、『うつほ

物語』に「笑ひ」との併用の萌芽が認められた。また『とりかへばや物語』が最も『源氏物語』を発展的に継承していることも明らかにになった。

「にほひやか」は美的表現でありながら、「ほほ笑み」「笑ひ」と併用されることによって、それが美的な仮面として機能するのみならず、その裏に隠されている動作主の本心を読み取る努力が必要な語という結論に至った。

視覚的に「にほひやか」な明るい笑顔に惑わされず、その奥に秘められているメッセージを見逃してはなるまい。笑顔を見せない桐壺更衣の例にしても、そのように深読みすべきではないだろうか。

〔注〕

(1) 『源氏物語』及びそれ以外の作品からの引用は、特に断わらない限り新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）に依る。

(2) 藤田加代「にほふ」「にほひ」考―源氏物語の例について―高知女子大国文9・昭和48年6月（『にほふ』と「かをる」―源氏物語における人物造型の手法とその表現

―（風間書房）昭和55年11月所収。また朱捷『においとひびき―日本と中国の美意識をたずねて―』（白水社）平成13年9月参照。

(3) 多少なりとも関係しそうなものとして、以下の4本があげられる。ただし犬塚氏を含めて「にほふ」と「にほひやか」を明確に区別しないで論じられている。

1 犬塚旦「句ふ」「句ひやか」「花やか」考―平安文学研究15・昭和29年6月↓『王朝美的語詞の研究』（笠間書院）昭和48年9月

2 本田和子「少年「源氏」の絵姿を追って―並びもなく句ひやかな若君」から「亡き人の面影の君」へ―源氏研究2・平成9年4月

3 吉村研一「源氏物語」において「あえか」という言葉が果たした役割―学習院大学日本語日本文学10・平成26年3月

4 藤本勝義「宇治中君―古代文学に於けるヒロインの系譜―」国語と国文学57―1・昭和55年1月↓『源氏物語の人ことば文化』（新典社）平成11年9月

(4) 注(3)の3吉村論文では、女三の宮の例を根拠にし

て、「あえか」の対蹠語として、「にほひやか」という言葉が浮かびあがる」としておられる。しかしながら女三の宮以外に「あえか」と併用された「にほひやか」の例がないので、即断は避けたい。

(5) 『うつほ物語』蔵開上巻に兼雅のことが「右大将、色合ひ、もてなし、中納言に似たまへり。氣高く匂ひやかに清らなり。年四十二(389頁)とあり、やはり「清ら」と併用されている。

(6) 注(3)の藤本論文では、「にほひやかなる」人物が主役になれぬ世界であることが見えてくる」(26頁)と述べておられる。

(7) 『うつほ物語』蔵開上巻には出産直後でやつれている女一の宮のことが、「少し青みたまへれど、いと貴に氣高く、さすがに匂ひやかにおはします」(351頁)と描写されている。ここでは「あて」と「にほひやか」の併用が可能になっている。

(8) 時代は下るが『兵部卿物語』にも、「按察使の君、にほひやかにうち笑ひて」と出ている。

(9) 「愛敬」と「にほひやか」が併用されている例は多いの

で、これも同系列に加えてもよきそうである。注(3)の藤本論文では玉鬘大君と宇治中の君について、「愛敬づく」、「にほひやかなり」は竹河大君と宇治中君に共通する美質であり」(24頁)と述べられている。